

インターロイキン6の早期炎症マーカーとしての有用性の検討

◎西原 ゆり¹⁾、佐々木 克幸¹⁾、西川 純子¹⁾、佐藤 郁美¹⁾、羽島 房子¹⁾、武田 卓也¹⁾、阿部 裕子¹⁾、藤巻 慎一¹⁾
東北大学病院 診療技術部 検査部門¹⁾

【背景及び目的】インターロイキン6 (IL-6) は侵襲に対する生体反応の制御に関与する主要な炎症性サイトカインであり、炎症の重症度把握や臓器障害の予測に有用とされる。今回、ICU入室患者のIL-6と他のバイオマーカーの推移を比較し、IL-6の炎症早期マーカーとしての有用性を検証した。また、IL-6値によるICU在室日数予測の可能性についても併せて検討した。

【方法】測定機器及び試薬はCobas8000、エクルーシス試薬IL-6 (ロシュ・ダイアグノスティクス株式会社)を使用した。対象は2021年6月から11月まで当院ICUに入室し、残余血清が得られた81名(循環器系術後群34名、消化器系術後群16名、その他術後群17名、その他群14名)とした。検討方法は、ICU入室後5日間のIL-6の経時的推移を他のバイオマーカー(PCT、CRP、SAA)と比較した。また、ICU入室背景(患者群)及び感染の有無がIL-6の変動に影響を及ぼすか確認した。さらに入室時のIL-6値とICU在室日数との関連について検討した。

【結果】IL-6はICU入室時にピークとなり、経時的に減少

する傾向を示し、入室時とそれ以降の測定値で有意差($p<0.05$)を認めただ一方で、PCT、CRP、SAAのピークは2日目以降であった。感染の有無についても同様の傾向を辿ったが、消化器系術後群やその他群では同様の傾向は認めなかった。また、ICU在室日数が4日以上群は3日以内群に比べICU入室時のIL-6値は有意に高い結果となった($p<0.05$)。

【まとめ】IL-6はPCT、CRP、SAAに比べICU入室後早期に出現することが確認され、早期炎症マーカーとして利用できることが示唆された。また、ICU入室時の値が在室日数の予測に寄与する可能性があり、炎症の程度や予後予測など、治療方針を早期に決定するためのバイオマーカーとして期待される。しかし、侵襲の程度や感染の有無がIL-6の推移に変動を与える可能性が示唆され、IL-6値の評価には他の所見を総合的に判断する必要があると思われる。今後は患者の診療情報を刷別化し、臨床的に有用な臨床判断値の設定を目指したい。

連絡先：022-717-7380 (生化学検査室)